令和５年度　第１回生駒市社会教育委員会議録（要約筆記）

１　日　時　令和５年７月12日（水）午前10時～午前11時45分

２　場　所　生駒市コミュニティセンター402・403会議室

３　出席者

（委　員）大谷裕美子委員（議長）・清水良亮委員（副議長）・岩本博子委員・
浦林直子委員・岡島保弘委員・岡本純子委員・上武敏一委員・
神田貴司委員・坂本剛伸委員・清水泰之委員・白井一三委員・
土本みさ子委員・中嶋宏明委員・連靖和委員

（事務局）八重生涯学習部長・清水生涯学習課長・井川生涯学習課長補佐・
西野図書館長・錦図書館課課長兼北分館長・谷江図書館南分館長・
入井駅前図書室室長・西スポーツ振興課長・大畑スポーツ振興課長補佐・
須田生涯学習係長・細川生涯学習係主事

（欠席者）なし

（会議の公開・非公開）公開

（傍聴者）なし

４　議事内容

(1)委員紹介

(2)副議長の選出について

(3)令和４年度「社会教育基本方針及び重点目標」にかかる実績報告

(4)その他

(1)委員紹介

(2)副議長の選出について

委員の交代により副議長を新たに選出し、全会一致で生駒市校長会の清水良亮委員に決定。

(3)令和４年度「社会教育基本方針及び重点目標に」にかかる実績報告

■重点目標１～４に係る事業の実施内容について、各課より説明を行った。

1「すべての人が楽しく、安心して成長し、活躍できる機会の創出」：生涯学習課

2「人と本、人と人をつなぎ、まちづくりの拠点となる可能性に満ちた図書館づくり」： 図書館

3「歴史・伝統文化・芸術を通じた、より豊かなまちの実現」：生涯学習課及び図書館

4「『健康』『生きがい』『仲間』『まち』をつくるスポーツの発展」：スポーツ振興課

■重点目標や事業についての質問や意見

清水泰之委員　他市の事例で、会話をしながら利用できる図書館がよい取り組みだと思った。従来、図書館は静かに読書をする場所とされてきたが、当該図書館では新たに「おしゃべりしながら本を読んでいい」と打ち出したところ、利用者にとても好評で、利用客も増えたそう。イベントもいいが、図書館は「人をどれだけ集められるか」が重要である。今後、図書館本館のリニューアルを進めるにあたって参考にされてはどうか。

土本委員　奈良市の三笠公民館には、貸室内に本棚があり、貸室利用の際に本を借りることができる。習い事や用事等のついでに本を借りてもらえる機会になるので、生駒市でもそのような取り組みをされてはどうか。

事務局　（清水委員・土本委員のご意見に対して）会話をしながら利用できるということは、まちづくりの拠点を目標としている図書館としての理想の形だといえる。一方で、しっかり本を読みたい人もいる。限られた空間の中で、双方のニーズを叶えていくために考えていきたい。

また、土本委員の「習い事や用事等のついでに本を借りてもらう」という形は、本市が進める「まちかど図書室」事業の目指しているところである。実際、習い事等の活動をしている方から、まちかど図書室の実施依頼も受けている。今後も「まちかど図書室」を市内各所に増やしていきたいので、委員の皆さんにも、まちかど図書室を活用したい方がおられたらぜひ教えていただきたい。

大谷委員　各課からの報告の中で、「子どもたち」や「親子で」といったワードが頻出していた。日ごろから児童・生徒や保護者との関わりがある校長会の清水良亮委員からご意見をいただきたい。

清水良亮委員　コロナ禍により、前年度までは学校でのさまざまな行事の開催に制限がかかっていたが、コロナが５類に移行したことから、今年度より各種行事の再開が予定されている。しかし、コロナ前と同様の形ですべてが実施できるわけではなく、新たな形を模索しているところである。地域の人や団体等からのアウトリーチもあり、そういった皆さんと協力しながら、学校として今までに経験したことがない新しい取り組みができるようになることを期待している。

上武委員　商工会議所としては、働き盛り世代に学んでもらうために、どうアプローチしていくか思案している。日本では社会に出てからの「学び」の意識が、欧米や諸外国に比べると低いという側面があると言われている。「学び」を疎かにすることが、将来の日本の発展に影響を与えるのではないかと危惧している。働き盛り世代に学んでもらえるよう、市の取り組みを進めてもらいたい。
また、働き盛り世代は本を読んでおらず、働いている人たちがビジネス文書を解読するのが難しくなっている印象を持っている。幼い頃から本に親しんでいく必要があると考えており、商工会議所としても読書を推進していきたい。
スポーツについては、「リレーマラソン」をおすすめしたい。働き盛り世代が盛り上がることができる競技だと思う。

中嶋委員　学びと交流の社会見学「まちミル」についてお聞きしたい。開催した後に、事業で紹介した地域の活動は広がりを見せているのか。

事務局　（中嶋委員のご意見に対して）「まちミル」は地域資源を活用した学びの場であり、参加者に地域の活動を知ってもらったり、自ら地域での活動に一歩踏み出すきっかけとなることを目的に開催している。昨年度、北小平尾の「ワクワ

ク農園」で開催したときは、市の農林課の担当者から、市内の農業の現状を説明したり、ファーマーズスクールや市民農園の案内なども行った。アンケート結果では、ファーマーズスクールへの参加や地域活動への意向を示す方もあり、今後も、参加者それぞれが新たな一歩を踏み出し、地域活動等に関わるきっかけとなるような企画を実施していきたい。

中嶋委員　「まちミル」をきっかけにして、地域の活動が広がっていくとよい。地域の中には、他にも素晴らしい活動をしている方々がいるので、どんどん取り上げていってほしい。活動の内容が発信されることで、市民の皆さんにも知ってもらうことができ、新たに参加しようと思う人も増えるのでは。

また、例えばフィールドワークのときに「まちかど図書室」を合わせて実施したり、「わくわく農園」で農林課と連携したように、他部署と協力して開催したらよいと思う。

事務局　（上武委員のご意見に対して）みんなのスポーツ推進事業「いこまスポーツの日」では「リレーマラソン」も行っている。また、「芝生でピラティス」は子育て中のお母さんたちが多数参加されるなど、子どもたちだけでなく成人向けのプログラムも実施している。

そのほか、総合型地域スポーツクラブでは、婚活事業や親子での農園体験、子育てママのストレッチ教室など、働き盛り世代を対象にした事業を実施しており、今後も多世代に参加してもらえるよう工夫していきたい。

岩本委員　保育園では3歳児を対象に、図書館から「3歳児のブックリスト」を案内いただいている。今年度からデジタル化されたことにより、ブックリストにアクセスする方法を記載した用紙を保護者に配布することになった。そのため、ブックリストを利用されるかどうかは保護者の裁量に任せてしまっていたが、情報をお渡しするだけでなく、ブックリストの内容を園でも共有し、子どもたちが本に親しむことができるよう、保護者の皆さんにもっと啓発していきたい。

浦林委員　事務局からの説明を受け、令和４年度はさまざまなイベントや事業に取り組んでいることがわかった。また、コミュニティスクールや図書館、市史編さんに関する事業など、市の各事業にボランティアが参加されていることも実感し、素晴らしいと感じている。

社会教育は「人づくり・地域づくり・つながりづくり」のためのものであり、学んだことを社会に還元、地域に還元していくことが最終的な目標である。一過性で終わらせることなく、地域に関わる「関係人口」を増やしていきたい。そこで、学びと活動が循環する仕組みとして「ボランティアポイント」を提案できればと考えているところである。これは、ボランティア活動をしたインセンティブとして、ポイントが得られるという仕組みで、例えば、いこま寿大学で学び、学んだことを生かして地域で活動したら、ポイントが得られる。そのポイントは介護サービスなどの市のサービスで使うことが出来るといったもの。ボランティアだけではモチベーションが続いていかない現状があり、ポイント制度によって地域での活動が自分のベネフィットにつながることを実感できれば、活動の持続性があがるのではないかと考えている。また、そういったわかりやすい成果があれば、学びを地域活動という形で社会に還元する人も増えるのではないか。

清水泰之委員　社会教育の基本方針に「すべてのライフステージで、楽しみながら学び、地域とつながる機会づくり」とあるが、「機会づくり」はあくまで手段であって目的ではないと思う。生涯学習の目的は地域づくりであって、学んだことを地域に持ち帰り、どう生かしていくかが重要だ。市で実施している各事業やイベントは地域づくりのためのあくまで手段である。各事業を実施した結果、どんな「人づくり」ができるのかを意識して教育部門と連携していってほしい。

坂本委員　基本方針には、「すべてのライフステージで、楽しみながら学び、地域とつながる機会づくり」とあるが、「すべてのライフステージ」とは何かをあらため

て考えていただきたい。子どもから大人になり、高齢者になるまで、すべてのライフステージはつながっており、次のステージに続くよう、ライフステージが進むにつれてステップアップしていくような学びが必要であると思う。各事業が点ではなく、線でつながるよう意識して事業を進めてもらいたい。
また、現代は「個」ではなく、「複数」が協力していく時代。例えば、自治会だと、近隣の複数自治会が協力して地域協議会をつくるなど、単体ではできないことを、皆で解決していこうというような流れである。そこで、社会教育もすべてを生駒市内で完結させるということではなく、内容によっては他市町村の事業とも連携するなどし、最適な実施方法を模索されるとよいのではないか。

岡島委員　事業内容の周知方法をもっと工夫する必要がある。市民の中でも、情報が届いていない人がいる。現在は、イベントの告知などの情報がいきなり案内されるが、多忙な世代は参加できないことが多い。そこで、過去になにをしていたか、活動や事業内容をアーカイブする「情報の倉庫」のような機能が必要であると考えている。1年前・2年前になにがあったかがわかると、今後の予定の検討もつけやすいのではないか。また、情報を掲載して終わりではなく、活動や事業内容を知ってもらう、参加してもらう努力も重要だと思う。

(4)その他

■今後の会議日程、研究大会の予定について（事務局より）

■（第3次）生駒市教育大綱策定に係るアンケートの依頼について

閉会